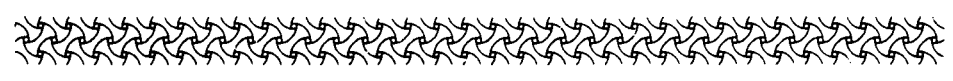


学内広報



2001 . 4 . 25
東京大学広報委員会

平成13年度東京大学入学式行われる (平成13年4月12日(木) 於 日本武道館)



入学式式典風景



式辞を述べる佐々木総長



式辞を述べる古田教養学部長

(2 , 8 ページに関連記事)

目次

特別記事	2
入学式における総長式辞、入学式における教養学部長式辞	
一般ニュース	8
総長の海外出張、入学式行われる、情報委員会規則の一部改正、医学部附属病院規則の一部改正、コンピュータ緊急対応チーム(UT CERT)規則の制定、量子相エレクトロニクス研究センターの門標上掲、教養	

学部で第91・92回オルガン演奏会の開催	
キャンパスニュース	11
平成12年度学部卒業者数、第74回五月祭の期日決まる、東京大学ハラスメント相談所を開設、本郷と駒場に相談室、東京大学医学部附属病院分院閉院式典・祝賀会を挙行、共済組合からのお知らせ	
訃報(吉山良一名誉教授、大野盛雄名誉教授)	14
淡青評論「評価雑感」	15

入学式における総長式辞



東京大学総長 佐々木 毅

本日ここに21世紀最初の入学式を迎えられた三千余名の皆さんに対し、東京大学を代表して心から歓迎の意を表する次第であります。

さて、皆さんはそれぞれに喜びや希望をもって今日を迎えたと思いますが、皆さんを取り巻く社会状況はこれこそ予断を許さないものがあります。この数年、今まで盤石の基盤を持っていたかのように思われてきた幾多の企業や組織が消滅し、歴史の猛烈な渦巻きにわれわれの生活が巻き込まれつつあることを皆さんも実感していると思います。この歴史の渦巻きは静まるどころか、これまでの仕組みの有効性は失われ、しかも、社会の精神的エネルギーや人材の力量や能力に対する深刻な疑念が高まり、「日本は危機にあり」という実感はますます深まっているように見受けられます。その結果として、政策の変更や仕組みの改革を越えたもっと根本的な変革、人間のあり方の変革が必要だと認識が深まっています。昨今の教育に対する関心の高まりの背景にはこうした危機感が確実に存在します。

従って、皆さんはこの数十年間なかったような古い秩序の終わりや歴史の「裂け目」を実感しつつ、入学式を迎えたということになります。こういう中でどのように人生の舵取りを進めていくかは、われわれ全てがそれぞれに考えなければならないテーマですが、特に、皆さんにとっては絶対に避けて通れないテーマであります。

これまで世間では東京大学に入学し、卒業することは将来の安定を保障するものといったものの見方が流布してきたように思われます。しかし、歴史の「裂け目」が牙を剥き、組織を次々と呑み込むような状況の中では、東京大学を卒業しようと、もはや一生の安定が保証される時代でないことは明らかであります。従って、皆さんに求められるのは先のような世間の俗説に支配されることなく、原点に立ち返って徹底的に今後の人生について考えることを今日から早速始めることだと思います。そこで基本的に求められるのは安定のために安定を求める「安住の精神」ではなく、これからの新しい社会の形成に具体的な場で積極的に取り組む「挑戦の精神」であります。「安住の精神」は「日本の危機」を長引かせ、社会的な閉塞感を増大させ、新しい展望を切り開く上で大きな障害となりつつあります。これから人生を本格的に歩み始める皆さんにとっては「安住の精神」は何物も与えてくれませんから、「挑戦の精神」をエネルギーに自

らの進路を切り拓いていく以外に選択肢は基本的にはないと思われま。東京大学は皆さんが自らの「挑戦の精神」を試し、鍛えるのに応答するだけの十分な人材と環境を備えていることは保証できます。皆さんに求めたいのは、そうした環境を使いこなす意志と気力です。

20世紀の日本は終わりました。それは暦の上で終わっただけではなく、その社会の実態においても終わりました。国家を中心に組織の網の目が張り巡らされ、そのどれかに属することによって安定を享受するという仕組みは今や切り裂かれ、財政の巨額の赤字が示しているように政府の将来に対してすら警戒信号が点滅している有様です。この10年近く日本は諸々の改革を実行してきましたが、その成果は極めて不徹底なものだといえませんでした。そして、21世紀の日本は仕組みの大改革と組み替えを行ないながら、新たな展望を確固としたものにしていかなければならないことはこれまた明らかであります。問題はそれに必要な人材と精神的なエネルギーをどのようにして調達できるかという点にあります。現在のところ、「安住の精神」と「挑戦の精神」との闘いはさながら拮抗状態にあるように見受けられます。こうした状態が続いているのは構造改革そのものが極めて巨大であり、一世紀にそう何回もないような大規模なものであるからであります。そこには多くの人間的犠牲も伴わざるを得ません。しかし、努力と工夫によって犠牲を出来るだけ少なくすることは可能です。他方で、安定のために安定を求める態度は目先の犠牲に敏感であっても、実際には将来において巨大な犠牲を払わざるを得ないような墓穴を自ら掘っているとも言えるわけです。ここでわれわれは二つのことを確認しなければなりません。第一に、どのような社会秩序もその存続能力には限界があること、安定は安逸を生みだし、安逸は墮落と解体につながり、どこかで再び「挑戦の精神」による社会の建て直しが必要になるといった一種の社会的循環が厳然としてあるということです。これは古来の賢人たちがそれぞれに指摘してきたところです。第二に、社会がどのような運命を辿るかは、結局のところ、そこに生きる人間たちの精神の持ち方に帰着するということです。歴史には多くの偶然がつきまといますが、こうした基本を忘れることは許されません。

こうした中であって将来の世代の教育を引き受ける日本の教育機関、特に、大学の責務は実に重いものがあり

ます。大学はこれまでのように社会秩序の安定性や有効性に頼って自らを設計するわけには行きません。むしろ、その建て直しに必要な人材の供給が任務となります。この点で東京大学としても是非とも応分の責任を果たしたいものだと思っております。東京大学としては、新世紀冒頭のこの歴史的な大転換に際し、良質な「挑戦の精神」の持ち主を数多く輩出し、更には、先駆的な役割を実際に果たすような人材を各方面に供給すること、それによって日本や世界に貢献できることは何よりも喜びとするところであります。それは内外の社会と東京大学との関係が新しい歩みを始めること、その関係がより幅広く深いものとなることを意味するからです。その意味で皆さんにかかる期待はとりわけ多大なものがあります。

こうした大枠を踏まえて皆さんがこれから東京大学で取り組むべき課題についてより具体的に考えてみたいと思います。それは一言で言えば、「基本に帰る」ということです。現在の「日本の危機」の根本原因としては基本が見失われ、気休めと先送り、「安住の精神」で物事を処理しようとするリアリズムの深刻な欠如をあげることができます。皆さんは絶対にこの轍を踏んではなりません。「基本に帰る」ということは、物事の本当の姿を冷徹に見極める精神的な意味での実力を身につけるということに他なりません。これは一生の課題だとも言えますが、若い時代にこうした努力と自己訓練を行なったかどうかはその人間の資質に決定的な刻印を残すことだけは断言していいと思います。

問題はその実力の中身です。昨今、ジャーナリズムの世界を中心に「学力低下」問題が議論の焦点として浮上して来ました。この問題自身、そう簡単には議論できない問題を含んでいます。しかし、例えば、特定の科目について単に知識が欠如しているといった意味での「学力低下」問題について言えば、東京大学としてはそれこそ情け容赦なく「学力低下」を防止し、その水準維持に努めざるを得ません。その意味では東京大学は決して卒業し易い大学ではありませんし、こうした「学力低下」問題への学部長や教授たちの関心は高く、早晩、各学部において学力のより厳格な管理システムが導入されるものと覚悟しておいていただきたい。この種の「学力低下」問題は私としてもこれを最も重要な課題の一つとして態勢作りに意欲的に取り組むつもりでいます。従って、皆さんもゆめゆめ油断することなく、この意味での学力の涵養に日夜心を砕いていただきたい。

しかし、大学で涵養しなければならない実力はこうした特定科目の学力に限られるものではありません。それは実力の必要な条件ではあっても十分な条件ではありません。その他に必要なものとして、従来知性だとか、教養だとか、考える力（思考力）であるとかいった回答がなされてきました。これらは先の特定科目の学力のようにはっきりとした輪郭のある知識ではありませんから、マニュアル化できないもの、とらえどころのないもの、何か知的アクセサリーに過ぎないものといった印象を生みだして来ました。とらえどころのないものは当然のこ

とながら説明しにくいものであり、結果として「どうでもよいもの」と見なされることも珍しくありませんでした。日本社会がある面でマニュアル社会だと言われていることは裏返していえば、こうした知的能力を軽視するような傾向があったことを示唆しています。しかし、全てがマニュアルで済むならば人格の持つ意味はなくなってしまいますし、本当に大事な事柄は実はマニュアル化できないという点に最大の特徴があるといつてよいでしょう。大事なことに直面するとしばしば「想定外のこと」という言葉が発せられますが、それで大事なことが処理できるわけではありません。

この輪郭が余りはっきりとはしないが決定的に大事な知的能力を仮に思い切って単純化して説明してみると、それはわれわれの判断に関わる能力ということができるでしょう。わたしたちが生きていく過程とは判断をしていく過程です。その中にはマニュアル化されたものもありますが、根本に遡って考えなければならない場合も少なくありません。われわれの直面する状況は個性的であり、何時も同じ判断をするわけにはいきません。また、いろいろな要素を考慮しながらわれわれは判断をすることになりますが、どこまでの要素を考慮に入れたいかについてそれこそマニュアルがあるわけではありません。特定の学問的知識を積み重ねれば判断を下せるというわけでもありません。そして、人間の存在感や人材の資質が言われるのは適切な判断を下す知的能力と結びついており、世の中において重い責任を負っている人々はほとんど毎日こうした難しい判断をすることを期待されております。また、学問の世界において目覚ましい業績をあげるためにはマニュアルの世界を越えた深い思考と洞察力が不可欠なことは改めて言うまでもありません。

世の中で「学力低下」を論ずる人々がこうした意味での知的能力の問題までどの程度意識しているかは明らかではありませんが、皆さんに求めたいのはこうした判断力の基盤となる人間や社会についての知的能力の幅広い陶冶です。文化という言葉は語源的にみて、こうした人間的態度に根差すものと言えます。この陶冶は一生続くともいえますが、柔軟な気質を持つ若い時期にそれを始めない限り、多くの成果を期待することはできません。ここで耕すべき対象は自分自身であり、いわばフロンティアは自分自身の中にあります。読書にしろ、他人との接触にしろ、それらは全てこのフロンティアの開拓のために活用可能なものです。「安住の精神」はしばしばマニュアル型の生活態度につながりますが、「挑戦の精神」を持ち、世の中で先駆的な役割を果たそうとする人間にとってこうした知的能力の涵養、「魂の深さ」の涵養は不可欠の要件です。

最後に学力であれ、知的能力の涵養であれ、それらを支えるものとしての各人の意志が問題になります。この意志は目標設定と深く結びついています。安定が行き渡った時代が終わったことはわれわれに強い意志が求められる時代が来たことを意味します。自らの実力を信じ、

目標に向かって邁進することがますます必要になることでしょう。そこでは、実力と結びついたプライドが常にテストされます。実際には、高い目標を狙った矢がそれに届かなかったということは人生では珍しくありません。しかし、それは決して不名誉なことではありませんし、初めから目標を持たないことが賞賛に値するものでもありません。東京大学には大きな目標を持った人材が雲霞のように集まって来ていると思います。互いに切磋琢磨しながら、皆さんのそれぞれの目標を鍛え、それを通して自らを厳しく鍛えていただきたい。

但し、目標の設定に当たって念頭に置かれなければならないことは個人的な目標に満足することなく、広く社会や「公共の事柄」に思いを致すという「志の高さ」を忘れないことです。これは「魂の広さ」とでも言うべき問題です。個人的な目標は所詮は個人的なものでしかありません。そこには緊張感の乏しさと墮落の可能性がないとはいえません。また、個人的な目標しか眼中にない人々が寄り集まっていくから政治を批判しても政治がよくなるのは何も不思議なことではありませんし、「公共の事柄」を有効に運ぶためにはそれにふさわしい人材が必要なのです。そして、「挑戦の精神」と「志の高さ」を備えた人材が皆さんの中から出てくることを日本社会は期待しています。

ある時期の日本社会は大学を出た若者にその実力を問うことなく気前よく職場を与え、それなりに安定を保証してくれました。しかし、今や皆さん自身が自らを鍛え、相当の準備をすることによってのみ将来が拓けてくるという覚悟で学生時代を送らなければならなくなりました。これを「運が悪い」と考える人が皆さんの中にもいるかも知れません。しかし公平に見て、ある時期の日本の学生たちの呑気さぶりが異常であったのであり、諸外国の経験に鑑みればむしろ事態は正常化しつつあると言っても過言ではありません。そして、社会が呑気な学生時代を送った世代に対してよりも皆さんの世代に対して大きな期待を寄せていることも恐らく事実でしょうし、真摯な学生生活を送ることは大きな人間的資産を将来皆さんに残すことにつながると信じます。

最後にこれから皆さんが数年間を送ることになる東京大学について幾つかの事柄を述べておきたいと思います。東京大学は学部学生だけで15,000名、10,000名を越える大学院生、医学部附属病院や研究所を含めると7,000名を越える教職員を擁する非常に規模の大きい大学です。また例えば、自然科学の権威ある国際的雑誌に掲載された論文を執筆した研究者の所属大学を調べてみますと、東京大学の研究者の執筆した論文数は世界の大学の中でトップクラスに入ることが知られています。これは本学がいかに大きな学問・知的資源を蓄積しているかの一例です。しかし、こうした高度の研究は国民の財政的支援によって初めて可能になったものであり、従って、それを社会に対してどのように「お返し」をしていくかが東京大学の大きな課題となっているのです。ここに大学と社会とがどのような関係を作っていくかという、現在の

大学が抱える重要なテーマの一つがあります。そしてますます明瞭になった事実は、大学の知的資源を上手に活用できない社会は世界のなかで間違いなく遅れをとることです。その意味で大学は大事な公共財と考えられますし、どこの国でも少なからぬ公的資金をそれに投じているのはそのためです。

かつて大学は「象牙の塔」と呼ばれた時代がありました。それは大学が科学や学術をそれ自身のために研究する場であり、他の社会活動とは違った目標を持った組織であるということを示す言葉でした。これは今でも基本的に変わりがありません。大学には企業や官公庁などに見られるような厳格な上下命令関係がほとんどありません。学生の皆さんを含め、全てのメンバーが科学と学術を追究し、真理を求めていく組織です。そして大学のメンバーは他の組織のメンバーと比べて極めて自由であり、自由を基盤に真理の追求が可能なのです。そして皆さんは今日からこの自由な組織のメンバーになるわけです。これは他の社会組織では見られない実に大学らしいところであり、このことの意味を皆さんに十分に噛み締めていただきたいものです。勿論、大学を企業のように経営すべきだとか、官公庁のように指揮命令系統で律すべきだとかといった議論が時々見られます。しかし、これは大学がどういうものであるかが分かっていない議論です。大学が社会的に意味があるのはそれが企業や官公庁のようなものでないからであり、大学をこれらと同じようなものにしてしまえば大学の存在意味がなくなってしまうだけのことです。要は、それぞれがその本来の任務を着実に果たすことが肝心な点であって、全体を雑然と混じり合わせるといったことはむしろ避けるべきなのです。

その上でなお大学の活動を社会が上手に活用したいと考えることは差し支えありません。これは大学といえども社会の一員であり、決して独立王国なわけではないからです。また、大学の知的活動の成果は国境の内に留まるものでもありません。「象牙の塔」という言葉は時には大学の社会的孤立を指摘するのに用いられましたが、今や大学は社会の知的活動の中心としてその成果を広く還元すべき存在なのです。大学はいわば「住み分け」を前提に社会の片隅で世間とは別世界を作り出すものであるよりも、もっと社会的な存在感が大きくなって然るべき存在なのです。しかも、企業その他がそうであるように大学も国際競争がますます熾烈になってきました。大学の活動についての規制緩和がますます必要なことは言うまでもありません。

このように考えますと、大学についての報道が入学試験との関係で専らなされてきたという、皆さんもよくご存じのような状況や、いわゆる国立大学の護送船団方式といわれたものは、いかに20世紀日本の仕組みと一体となった「住み分け」の発想に基づいているかが分かります。しかし、先にも述べたように20世紀の日本は終わったのです。どの大学に入学し、卒業するかではなく、何をどれだけ学び、何ができる人間を育てたのが大学に

問われている点なのです。社会の関心が入学と卒業という区切りにばかり向き、その内部でどのような教育や研究が行なわれているかに無関心でいられる時代は終わったのです。これは大学に勤務する教職員の能力を厳しく問い直すことにつながることは言うまでもありません。そして例えば、教育面での改革は今や緊急の課題ですが、教育面での改革を実施していくためには皆さんの建設的な協力が是非とも必要です。教育面での皆さんからの改革提言を大いに歓迎しますので、私に直接具体的な提案を寄せてください。

さて、研究・教育の面で思い切った見直しを行ない、教職員の潜在的な能力を引き出していくために、東京大学は独立した法人格を持つことに躊躇すべきでないというのが私の見解です。先に述べたように大学はあくまで研究・教育の場であるという点を確認した上でどのような運営の仕方をするかという点については、人材をより適切に配置し、より適切に処遇することや、有益な外部の意見を取り入れるといったことなど、工夫すべき点は多々あると思います。しかし同時に、こうした大学のあり方を実現するためには貴重な資源の「横並び的」配分とは違った、選択的・集中的投下の仕組みが、政府の政策目標として明確に示されることが不可欠な条件であることを強く申し添える必要があります。

以上縷々述べましたように、現在の日本は巨大な規模の変革期に当たっております。社会も大学も、そして個人個人もその渦巻きの中で格闘しております。この変革期を恐れるどころかむしろ一つの好機ととらえ、「挑戦の精神」と「高い志」とを武器に堂々と、生きていただきたい。東京大学はそうした若い人々に対する満腔の支援を惜しまない。これが今日ここに入学式を迎えた皆さんに対する私の、そして東京大学のメッセージです。

平成13年（2001年）4月12日

入学式における教養学部長式辞



東京大学教養学部長 古田元夫

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。東京大学では、新入生全員が駒場にある教養学部で2年間勉強し、それから専門諸学部へ進学することになっています。私は、皆さんにとっての東京大学の入り口にあたる教養学部の教職員を代表して、心からの歓迎の意を表したいと思います。

さて、今日4月12日は東京大学の創立記念日です。東京大学は1877年の発足からすでに120年以上の歴史をもっていますが、教養学部は第二次世界大戦後の学制改革の中で、新制の東京大学の一部として1949年に誕生した、ようやく50年の歴史を刻んだばかりの、東京大学の中では若い学部です。

このように、東京大学を含め、教養学部ないし教養部という組織が日本の大学に設けられたのは、第二次世界大戦までの日本の大学教育が専門教育に偏重しており、そこで養成された視野の狭い専門家が軍国主義の台頭を防げず、日本を戦争の惨禍へと導いたという反省から、幅広い視野をもった健全な市民を養成する一般教育 教養教育を重視するという理念が掲げられたためでした。

日本の大学の教養教育をめぐる状況は、この10年あまりの間に大きく変化しました。1990年代の初頭には、大学教育の大綱化・自由化ということで、それまであった専門教育と一般教育の区別が廃止され、大学教育の編成がそれぞれの大学の自主的裁量に委ねられるようになりました。これは、必ずしも一般教育、教養教育の軽視を意図したものではありませんでしたが、実際にはそれまで全国の国立大学で一般教育、教養教育を担当していた教養部が次々に解体されるという結果を招きました。この1990年代の前半は、教養教育に対する風当たりがきわめて厳しい時代だったと思います。

しかし90年代の後半になると、教養教育に対する風向きは大きく変化しました。これは佐々木総長が言われた「歴史の裂け目」ということと密接に関連した現象だと思われまふ。つまり、バブルの崩壊後、日本のそれまでのあり方、そして先行きに対する不安が拡大したことが、教養の必要性の再評価につながったということです。文部省 今日文部科学省に設けられた様々な審議会が教養教育の重要性を指摘する答申をだし、今では教養教育は大学教育に限定されない教育全般にかかわる問題として、その必要性が強調されるようになっています。

大学という場に即して言えば、教養教育の必要性は三つの角度から高まっていると思います。まず第一は、社会・経済の高度化・複雑化です。これは、高度の専門性

への要求を高める一方で、さまざまな分野間の相互関連や影響が密接になる状況を生み出しており、幅広い視野がいかなる専門にとっても必要不可欠になっています。第二は、科学や技術の高度化に伴って、それを活用する人間に高い倫理性と社会性が求められるようになっており、地球社会を担う責任ある個人としての自覚を養うことが必要であるということです。そして第三は、今日のいわゆるグローバリゼーションとの関連です。グローバリゼーションが急速に進展している今日の世界は、他面では異質な文化がそれぞれの個性を強く主張しあう世界でもあります。このような世界で生きるためには異文化理解が不可欠であり、教養教育の今日的意義の一つはこの点にあります。

皆さんの東京大学では、90年代前半の「教養」が危機だった時代に教養学部を堅持するという選択をしました。全国の国立大学で教養部が解体された時に、東京大学でこのような選択が可能だったのは、基本的には、新制東京大学が、教養教育の理念を重く受け止め、教養教育を担当する部局を、他の専門学部と同等の学部、つまり教養学部とし、全学的な支援のもとにその充実につとめてきたという歴史をもっていたからです。初代の教養学部長をつとめられたのは、経済学部長をしておられた矢内原忠雄先生という方で、先生はその後第16代の東京大学総長にもなっておられます。この矢内原先生は、『教養学部報』という今でも続いている教養学部の新聞の創刊号で、「よい教養学部が出来なければ、よい東京大学はできない。新制大学としての死命を制するものは、教養学部である」と述べておられます。これは、教養学部の発足以来、現在にまで至る東京大学の基本的な考え方があります。

もっとも、こうした歴史の遺産だけでは、90年代前半の教養教育の危機の時代を東京大学教養学部は乗りきれなかったかもしれません。東京大学の教養学部が、東京大学全体の理解と協力を得て、この時代に教養教育、中でも1、2年生に対する前期課程教育の大幅な刷新をなしたことが、もう一つの側面として大きかったと思われまふ。皆さんがこれから駒場での2年間に勉強される前期課程のカリキュラムは、1993年にその基本的な構成を大きく変えた形のもので、この時の改革では、前期課程教育の基本的な目標を、専門教育に進む前段階において、同時代の知 知識の知ですが、同時代の知に関する広い見識とそれによって涵養される豊かな判断力を養うこと、および同時代の知の基本的な枠組みの学習と、

そのような知にとって不可欠の基本的な技法を習得することに、再定義しました。これに基づいて、現代の学生の知的関心に呼応した授業科目の開設、コンピューターリタラシーの必修科目としての導入、そして知識を学ぶのではなく、大学での学習の基本的な技法を身につけるための基礎演習の開設など、様々な試みが展開されるようになりました。

教養教育の重要性が強調されるようになった今日、私たちは一面で教養学部を充実したものに努力に一貫して取り組んできた東京大学の選択を誇りに思っています。しかし教養が強調されるということは、それだけ時代状況が厳しいということであり、いままで以上に教養学部自身にもその教育の質の向上に関する重大な責務が課せられており、不断の自己革新が求められています。と同時に今回入学を果たした新入生の皆さんにも、大学の不可欠の構成員としての努力が要求されます。

先ほども申しましたように、今日のような時代の教養の涵養にとっては、外国はもちろん、異なる世代や時代をふくめた自分とは異なる考え方、生き方、習慣などあらゆる「自分とは異なる者」という意味での異文化との接触・交流が重要な意味をもっています。

このような角度から見た時、東京大学教養学部というところは、様々な次元での「異質な他者」との出会いを可能にしてくれる場です。まず、教養学部は、文科系の教官もいれば理科系の教官もいる総合的性格をもった学部で、カリキュラムもきわめて多彩でありかつ選択の余地が大きいという特徴をもっています。さらに、学生の構成という点でも多様です。今年の新入生の出身高校の構成を見ても過半数は関東地方以外の高校の出身で、依然東京大学は日本全国各地から学生の集まる大学という性格を強くもっています。これに、東京大学の多様性を構成する重要な担い手としての、いわゆる帰国子女や外国人留学生として入学を果たした方々が加わっています。このような場で、自らの狭い殻に閉じこもることなく、大いに「異質な他者」との出会いに、勉強という面でも、教官や友人との交流という面でも挑戦してほしいと思います。

大学という「知の共同体」において出会う「他者」は、知という同じ目的をもつ、いわば同じゲームを行っている他者です。ここでは、自ずとある種のゲームのルール、つまりはモラルが求められます。そこでは、自分の意見・主張を明確にすることが求められますが、この自己主張とは「私はこう感じる」とか「こう思う」という類のものではなく、あくまでも論理的で客観的な裏付けがあることを要求されます。主観的で感情的な判断ではなく、相手に反論の余地を与えること、もっといえば他者の反論によって自らの議論が乗り越えられることを常に期待することが求められるのです。

このような「知の共同体」としての大学に求められるモラルは、いわゆる自分が気に食わない時に「切れてしまふ」ということと全く逆のものです。私は、最近の若者は「切れやすい」という評価に安易に同調するつもり

はありませんが、「切れる」ということは「異質な他者」との交わりにとっては基本的な障害であり、「知の共同体」としての大学の存立を危うくするものです。簡単に「切れる」ことなく、「異質な他者」に学び自らを大きくしていくことは、これからの時代に生きぬくための重要な資質であり、東京大学教養学部はこうした資質を高める上では絶好の場であります。

学習の面で「異質な他者」との出会いを求めるということは、これまでの興味・関心から抜け出して、新しい分野の学習に挑戦することを意味しますが、学習の面では、このことと同時に、将来の進路を見据えてしっかりとした基礎を積み上げることに注意していただきたいと思います。学問の高度化が進む中で、いまでは、一人前の専門家になるためには大学院までいかないといふ不可能という領域が拡大していますが、これは大学院に進んでから本格的な勉強はすべよという意味では全くありません。地道な積み上げは、どのような分野においても学部前期課程のうちから必要な作業です。

東京大学教養学部は、発足以来「リベラル・アーツ」教育を基本的な理念として掲げてきました。「リベラル・アーツ」とは、古代ギリシャまでさかのぼれる概念ですが、近代においては、実利性、職業性、専門性といったものから自由な学問という意味で、西欧の知的エリートの教養のありかたを表す概念としてつかわれてきました。私たちは、21世紀を迎えた今日、グローバル化が進む世界で真の知的なリーダーとして活躍する、つまりは真の世界市民たる人材を養成するには、総合的判断力、社会的責任感、地球的な視野という三つの資質が不可欠であり、これらを涵養するところに今日的な「リベラル・アーツ」教育の主眼が置かれるべきだと考えています。そして、この「リベラル・アーツ」教育は、学生の皆さんを一つの鑄型にはめ込むのではなく、様々な種が様々な花を結ぶように、皆さん一人一人がもつ豊かな個性を開花させるところに、その究極の主眼を置いています。

東京大学の、教養学部の教育理念が皆さん一人一人に異なった形で体现されるべきものとすれば、今年、東京大学が三千数百名の新入生を迎えたということは、東京大学という花壇に三千数百本の異なる花をさかせる苗木が植えられたことを意味します。大学は、三千数百の異質な個性との出会いに胸を躍らせています。21世紀最初の新入生となられた皆さんが、教養学部をそして東京大学を豊かにする主体となり、時代に春の訪れをつける活躍をされんことを期待して、教養学部長の式辞とさせていただきます。

平成13年（2001年）4月12日

≡ 一般ニュース ≡

総長の海外出張

佐々木総長は、平成13年4月22日（日）から4月25日（水）までの間、アメリカ大学連合（AAU）国際会議出席のため、アメリカ合衆国へ、また、平成13年5月1日（火）から5月4日（金）までの間、日仏高等教育シンポジウム出席のため、フランスへそれぞれ出張する。

入学式行われる

3,318人の新入生が誕生

平成13年度の入学式が4月12日（木）、日本武道館で行われた。式には約3,230人の新入生と、その父母など約4,930人、合わせて約8,160人が出席した。

午前10時18分、本学音楽部管弦楽団による、ワーグナー作曲の「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」が演奏され、佐々木総長はじめ各学部長、附属図書館長、事務局長が登壇し10時31分開式となった。

式はまず、音楽部管弦楽団、音楽部コーラアカデミーによる学生歌「足音を高めよ」の演奏があったのち、佐々木総長が26分にわたって式辞を述べた。続いて古田教養学部長の式辞があり、最後に応援歌「ただ一つ」の演奏をもって、11時20分式を終えた。

4月17日（火）開催の評議会において、次のとおり規則の制定及び一部改正が承認された。

情報委員会規則の一部改正

東京大学情報委員会規則の一部を改正する規則

情報ネットワークシステム専門委員会のあり方について審議した結果、情報ネットワークシステム専門委員会を廃止し、情報基盤専門委員会へ整理・統合することとしたこと、並びに本学の組織の整備に伴い本委員会委員の充実のため、所要の改正を行ったものである。

附 則

- 1 この規則は、平成13年4月17日から施行し、改正後の東京大学情報委員会規則の規定は、平成13年4月1日から適用する。
- 2 東京大学情報ネットワークシステム専門委員会規則（平成11年12月1日制定）は、廃止する。

了 解 事 項

（平成13年4月1日）

第1項第1号中「新領域創成科学研究科長」の次に「、大学院情報学環長、大学院情報理工学系研究科長」を加える。

医学部附属病院規則の一部改正

東京大学医学部附属病院規則の一部を改正する規則

国立大学の附属病院等の中央診療施設等に関する訓令（昭和42年文部省訓令第24号）の一部改正により、新たに臨床試験部が設置されたこと及び中央診療施設の名称が変更されたことに伴い、所要の改正を行ったものである。

附 則

この規則は、平成13年4月17日から施行し、改正後の東京大学医学部附属病院規則の規定は、平成13年4月1日から適用する。

コンピュータ緊急対応チーム（UT CERT）規則の制定

本学の情報ネットワークの運用及び管理に関する情報セキュリティ確保の全学協力体制整備のため、部局を超えた情報セキュリティ問題に対処する組織として、本学に東京大学コンピュータ緊急対応チーム（University of Tokyo Computer Emergency Response Team）を情報基盤専門委員会のもとに設置することに伴い、本規則を制定したものである。

東京大学コンピュータ緊急対応チーム（UT CERT）規則（設置）

第1条 東京大学（以下「本学」という。）における情報セキュリティ確保の全学協力体制整備のため、部局を超えた情報セキュリティ問題を担当する組織として、東京大学コンピュータ緊急対応チーム（University of Tokyo Computer Emergency Response Team以下「UT CERT」という。）を情報基盤専門委員会（以下「専門委員会」という。）のもとに設置する。

（業務）

第2条 UT CERTは、東京大学情報ネットワークシステム（以下「UTnet」という。）に関し、部局に置かれたコンピュータ緊急対応チーム（以下「部局CERT」という。）と連携して以下の業務を行う。

- (1) 不正アクセス等に対する予防策について、部局等が行う利用者への情報提供と予防策の実施の指導に対する支援
- (2) 情報セキュリティに関連する学外との連絡の窓口業務
- (3) 部局のネットワーク等に緊急事態が発生したときの、当該ネットワーク等の強制的な遮断・隔離に関する部局CERTへの勧告
- (4) UTnetに接続されたシステムの緊急対応に関する事項
- (5) その他、全学的情報セキュリティ問題の調整等に関する事項

2 UT CERTは、重大な不正アクセス等が発生したと

きには、部局CERTの実施する原因究明及び再発防止対策に協力するとともに、事実経過を遅滞なく専門委員会に報告しなければならない。

(組織)

第3条 UT CERTは、総括責任者及び委員若干名をもって組織する。

2 委員は、情報セキュリティに関する専門的知識を有する本学の教職員のうちから専門委員会委員長が指名する。

3 総括責任者は、委員のうちから専門委員会委員長が指名する。

(総括責任者)

第4条 総括責任者は、UT CERTの業務の実施を総括する。

2 総括責任者に事故があるときは、あらかじめ総括責任者の指名する委員がその職務を代理する。

(任期)

第5条 委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

2 委員が任期途中で交代したときは、新委員の任期は前任者の残任期間とする。

(守秘義務)

第6条 委員は、その職務上知り得た秘密を漏らしてはならない。

(庶務)

第7条 UT CERTの庶務は、情報基盤センターにおいて処理する。

(補則)

第8条 この規則に定めるもののほか、UT CERTの運営に関し必要な事項は、専門委員会の定めるところによる。

附 則

この規則は、平成13年4月1日から施行する。

量子相エレクトロニクス研究センターの門標上掲

平成13年4月に工学系研究科附属として発足した量子相エレクトロニクス研究センターの門標上掲式が、4月11日(水)に小宮山宏工学系研究科長、五神真センター長はじめ関係者が見守るなか、工学部6号館玄関前で行われた。

量子論はその誕生から1世紀が経過し、量子効果を用いた素子が実用化されるなど工学にも深く浸透しつつある。しかし、「高温超伝導」のように物質の中で多くの自由度が強く作用しあっている量子状態は、現代の物理学でも依然解明されていない難問であると同時に、未利用の応用分野が広大に広がっている。

量子相エレクトロニクス研究センターは工学系研究科物理工学専攻のグループが科学研究費(COE形式基礎研究費)として平成8年度から進めてきた研究課題「スピン・電荷・光結合系の相制御」の成果を踏まえて設立されたものである。ここでは多数の電子が強く相互作用している系が示す多彩な量子力学的物質相に着目し、その相を制御するための物理学を開拓し、それを利用した新しいエレクトロニクスの構築を目指して研究教育を推進する。



五神センター長(左)と小宮山工学系研究科長
(大学院工学系研究科・工学部)

教養学部で第91・92回オルガン演奏会の開催

第91回オルガン演奏会

教養学部では、《バッハとその源流》をテーマに恒例のオルガン演奏会を次のとおり開催いたします。このたびは、オルガンのベルンハルト・レーマーさんをドイツからお迎えし、ブルーンズ、ブクステフーデ、バッハの曲をお楽しみいただきます。

入場は無料です。また、ホームページを開設しておりますので、ぜひご覧下さい。

<http://www.platon.c.u.tokyo.ac.jp>

日時 5月18日(金)午後6時30分開演

場所 教養学部900番教室

曲目 N・ブルーンズ

前奏曲 ホ短調

D・ブクステフーデ

「来たれ聖霊、主なる神」(BuxWV .199)

トッカータ ヘ長調 (BuxWV .156)

J・S・バッハ

「おお人よ、汝の罪の大いなるを嘆け」

(BWV .622)

トッカータ・アダージョとフーガ 八長調

(BWV 564)

「わが魂よ、装いせよ」(BWV .654)

パッサカリア 八短調 (BWV 582)

演奏 ベルンハルト・レーマー(オルガン)

J・S・バッハ

「18のコラール集」より

「いと高きにある神にのみ栄光あれ」

(BWV .662)

「いと高きにある神にのみ栄光あれ」

(BWV .663)

F・メンデルスゾーン

「6つのオルガンソナタ」より5番 二長調

(op .65, no .5)

C・サン＝サーンス

歌劇「サムソンとデリラ」(op .47)より

「バックナール」

演奏 ジャネット・フィッセル(オルガン)

コリン・アンドリュウズ(オルガン)

(大学院総合文化研究科・教養学部)

第92回オルガン演奏会

教養学部では、《ジャネット&コリン オルガン・デュオ》をテーマに恒例のオルガン演奏会を次のとおり開催いたします。このたびは、ジャネット・フィッセルさん(イギリス)とコリン・アンドリュウズさん(アメリカ)ご夫婦をお迎えし、ソロとめずらしいデュエットによるオルガン演奏の数々をお楽しみいただきます。

入場は無料です。また、ホームページを開設しておりますので、ぜひご覧下さい。

<http://www.platon.c.u.tokyo.ac.jp>

日時 5月25日(金)午後6時30分開演

場所 教養学部900番教室

曲目 M・イッポリトフ＝イワーノフ

組曲「コーカサスの風景」(op .10)より

「酋長の行進」

P・バターソン

トッカータ「フロレッセンス」

G・ベーム

コラール・パルティータ「ああいかに空しく、

いかにはかなきことよ」

J・ボネ

協奏変奏曲

R・グリエール

バレエ組曲「赤いけしの花」(op .70)より

「ロシア水夫の踊り」

≡ キャンパスニュース ≡

平成12年度学部卒業生数

平成12年4月から平成13年3月までの学部卒業生数は、下表のとおりである。

区 分		卒 業 者 数			外国人留学生 (内数)
		男	女	計	
法 学 部		482	119	601	4
医学部	医 学 科	90	16	106	0
	健康科学・看護学科	25	18	43	0
工 学 部		886	76	962	17
文 学 部		254	121	375	2
理 学 部		264	49	313	1
農学部	各 課 程	179	73	252	0
	獣医学課程	19	14	33	0
経 済 学 部		300	60	360	4
教 養 学 部		147	59	206	1
教 育 学 部		53	39	92	0
薬 学 部		58	27	85	0
合 計		2757	671	3428	29

第74回五月祭の期日決まる

本年度の五月祭の開催期間は、5月25日(金)午後から5月27日(日)までと決定しました。

五月祭の期日や企画内容等の基本事項については、学生委員会と五月祭常任委員会との間で3月中旬から協議を行って来ましたが、この程合意に達しました。これを受け4月10日(火)の学部長会議に報告し、了承されました。これに伴い、5月25日(金)午後の学部の授業は休止となります。

また、例年どおり金曜日の午後は学内公開、土・日曜日は一般公開にあてられます。

東京大学ハラスメント相談所を開設
本郷と駒場に相談室

3月21日(水)午前10時に東京大学ハラスメント相談所が開設されました。相談所には本郷キャンパス相談室と駒場キャンパス相談室が設けられ、本郷キャンパス相談室は同日、駒場キャンパス相談室は4月2日に開室されました。



*相談所のロゴマークは、人の顔と「心」という字をイメージしたもの。色は東京大学のスクールカラーであるライトブルー。

東京大学では、昨年7月、教育・研究の場である大学に相応しいセクシュアル・ハラスメントに関する倫理を明らかにするとともに、セクシュアル・ハラスメントの

防止や被害救済のための学内体制を整えるため、東京大学におけるセクシュアル・ハラスメント防止のための倫理と体制の綱領及び東京大学セクシュアル・ハラスメント防止宣言を、評議会で決めました。これに基づき、セクシュアル・ハラスメントの防止と被害者の救済を担当する全学的組織としてハラスメント防止委員会を10月に発足させ、皆さんの行動指針としてセクシュアル・ハラスメント防止のためのガイドラインを作成しました。

東京大学ハラスメント相談所は、東京大学におけるハラスメント防止体制の一環として設けられたものです。被害にあわれた方や被害者から相談を受けた方は、従来どおり学生相談所、保健センター、部局相談員に相談することもできますが、新設のハラスメント相談所には専門の相談員がおり、個人のプライバシーに十分配慮して、相談者の立場に立って相談に応じます。所属の部局等を問わずいづれの相談室も利用できますので、お気軽に連絡をお取り下さい。

相談所の場所、相談時間、連絡先は以下のとおりです。
本郷キャンパス相談室：安田講堂3階

月から金曜日(祝日を除く)10時00分 17時00分開室
電話5841 2233(内線22233) Fax 5841 2400

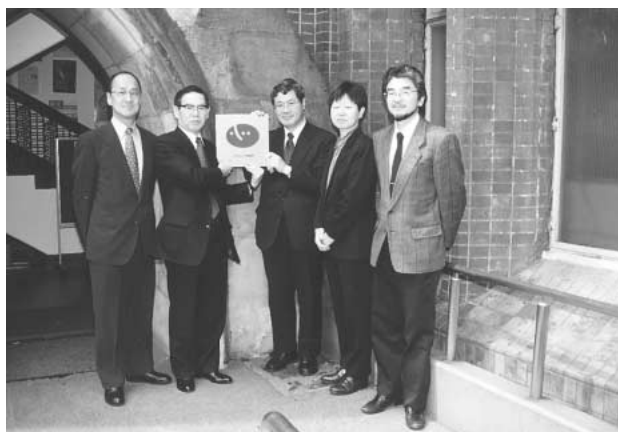
駒場キャンパス相談室：教養学部図書館4階411号室

月・水・金曜日(祝日を除く)10時00分 17時00分開室
電話5454 6159(内線46159) Fax 5454 6159

ただし、当分の間は本郷キャンパス相談室で相談を受け付けます。

e-mailアドレス(東京大学ハラスメント相談所共通)
soudan@har.u.tokyo.ac.jp

東京大学にはこのほか、加害者とのトラブルの調停制



看板を掲げる左から内田ハラスメント防止委員。青山元委員長、碓井相談所長、大澤、市川委員（本郷キャンパス相談所）



左から内田、瀧田、大澤ハラスメント防止委員
碓井ハラスメント相談所長（駒場キャンパス相談所）

度やハラスメント防止委員会による正式の救済措置も用意されています。ハラスメント相談所がその申し立てを取り次ぎますので、詳細は相談員にご相談下さい。

東京大学医学部附属病院分院閉院式典・祝賀会を挙行

東京大学医学部附属病院分院は、明治30年（1897年）に内務省医術開業試験場（通称、永楽病院）として設立され、その後幾多の変遷を経て大正6年（1917年）8月に東京帝国大学に移管された後、現在に至るまでの間、医学部学生の教育、医師の卒後教育・臨床研究及び地域医療センターとしての使命をもって、あらゆる分野の研鑽の場として発展し、平成13年（2001年）4月に医学部附属病院との組織統合により104年にわたる歴史を閉じることとなった。これを記念し、3月22日（木）に山上会館で閉院式典並びに御殿下記念館ジムナジウムで閉院祝賀会を挙行した。

閉院式典には、学内外関係者約60名が出席。はじめに藤田敏郎医学部附属病院分院長から式辞が述べられた後、村田貴司文部科学省高等教育局医学教育課長から祝辞が述べられた。

続いて蓮實重彦総長から挨拶が述べられた。また、桐野高明大学院医学系研究科長・医学部長、武谷雄二医学部附属病院長からそれぞれ挨拶が述べられた後、煙山力文京区長から来賓祝辞があった。

また、式典終了後に行われた閉院祝賀会では、学内外関係者約270名が出席。はじめに藤田敏郎医学部附属病院分院長から挨拶が述べられた後、尾形悦郎元医学部附属病院分院長、大原毅元医学部附属病院分院長、森山弘子前医学部附属病院看護部長からそれぞれ祝辞が述べられ、小林太刀夫元医学部附属病院分院長の発声により祝杯を挙げた。また、祝宴の中では小松公助元医学部附属病院分院事務長、影山初子前医学部附属病院分院看護部長から分院の思い出が述べられた。上西紀夫医学部附属病院分院副院長から閉会の辞が述べられ、盛会裡の内に終了した。



式辞を述べる藤田医学部附属病院分院長
（大学院医学系研究科・医学部）

共済組合からのお知らせ

東京大学に来られた教職員の皆様へ

既に、ご承知のことと思いますが、皆様は採用等により文部科学省共済組合東京大学支部の組合員になりましたので、「組合員資格取得届」を各部局の共済担当掛へ提出することとなっております。また、扶養者がおられる方は「被扶養者申請書」も同様に共済担当掛へ提出することとなっております。

まだ、「組合員資格取得届」等を提出されていない方は、早急に手続きくださるようお願いいたします。

なお、「被扶養者申請書」の手続きが遅れた場合、被扶養者の認定日が事実発生日以降となり、皆様の不利益となる場合がありますので、注意してください。

被扶養者の家族が就職された皆様へ

子供が就職した場合や配偶者が年額130万円以上（月額108,333円）の収入がある場合は、被扶養者の取消し手続きが必要となります。

なおこの手続きが遅れた場合、医療費の返還など皆様の不利益となる場合がありますので、注意してください。

上記手続等について、ご不明な点がございましたら、各部局共済担当掛又は経理部経理課共済第二掛（内線22174～22176）にお問い合わせください。

≡ 広報委員会 ≡

〔訂正〕

〔学内広報〕No.1212（2001.4.11）の特別記事「卒業式における総長告辞」、「卒業式における卒業生代表挨拶（卒業生代表理学部杉山昌広）」、及び一般ニュース「卒業式行われる」の中で、卒業生数が3,430人とされておりますが、その後の調べで卒業生の数は3,428人であることが判明致しましたので、訂正致します。

吉山 良一 名誉教授

本学名誉教授吉山良一先生は、3月18日（日）御病気のためご逝去されました。享年91歳でした。

先生は明治42年鹿児島県でお生まれになり、昭和8年東京帝国大学理学部地震学科をご卒業になりました。その後、大学院に1年間在学された後、昭和9年3月に東京帝国大学理学部副手（地震学科）の嘱託、昭和12年に同助手に任官されました。昭和16年には、九州帝国大学物理学科助教授として迎えられ、さらに昭和20年7月には京城帝国大学教授に任ぜられました。しかし、任地の京城に赴くことなく終戦となり、昭和21年12月には九州帝国大学に助教授として復職されました。昭和30年5月に東京大学地震研究所教授に昇任、昭和45年3月の停年退官まで理論地震学の研究と後進の教育に尽力されました。その後、昭和50年まで鹿児島大学教授として教育研究に従事されました。

先生のご研究の特徴は、その緻密さ、つまり、理論的に考え得るすべての条件を詳細に吟味することにあります。



す。特に、初期の不均質な弾性球内を伝播する弾性波の研究は世界に先駆けて行われたものであり、振幅分布は震波線に沿って保存されるなどの地震波動論上の重要な事実を指摘されました。また、走時曲線の有すべき性質、地球内部のポアソン比の分布、潮位の解析など多方面にわたって問題点を理論的に提起されるとともにその解決指針を示されました。地震エネルギーを考える際の留意点を指摘したご研究は、その発表後30年以上経過していますが、未だに重要な意味を持っています。

先生のご研究は、このようにきわめて厳密でありましたが、後進の教育・指導もたいへん厳格でありました。このような指導を直接・間接に受けて育った理論地震学の研究者は、決して少なくありません。

先生は、日本学術会議地球物理学研究連絡委員会委員、学術奨励審議会専門委員などを歴任され学識経験者としても大きな貢献をされました。

ここに、先生の卓越したご功績とご人徳を偲び、謹んでご冥福をお祈りします。

（地震研究所）

大野 盛雄 名誉教授

本学名誉教授・元東洋文化研究所長大野盛雄先生は、去る4月4日逝去されました。享年76歳でした。先生は、昭和25年東京帝国大学理学部、同28年東京大学経済学部を卒業後、東京大学東洋文化研究所助手、明治大学講師などを経て、昭和39年東京大学東洋文化研究所講師、助教授、ついで昭和43年教授に昇任されました。以来、人文地理学の方法を踏まえつつ、イラン・アフガニスタンを中心に西アジア農村の研究と教育に専念されました。昭和51年から53年、及び57年から59年には東洋文化研究所長、同附属東洋学文献センター長として



本所の発展に尽力されました。

先生は、イランを中心に西アジア農村社会のフィールドワークに基づく研究を進められ『ペルシアの農村』を刊行され、我が国の西アジア農村研究を国際水準に高められるとともに、ユニークな比較文化論をも構築されました。

退官後も大東文化大学国際関係学部長として同学部の創設発展に尽されました。日々の革新をモットーに常に若々しく活躍された先生の面影は、知友学生の心の中に永久に残ることでしょう。

謹んで冥福をお祈り申し上げます。

（東洋文化研究所）

評価雑感

もう何年も前であるが、「学術研究と評価：我が国における研究評価の手法の総合的研究」という審議会の末席に連なったことがある。大学等における研究活動を評価する際の方法論・システムティックのようなものを検討する趣旨であった。「評価」が強調される今の時代を先取りしたものだった

と思うのだが、議論を重ねるほどに分野ごとのカルチャーの違いなどが浮き彫りになり、難しさばかりが再認識されることになった。いま各部署で行われているであろう任期制の議論においても、「評価」が最大の問題であることは想像に難くない。

そもそも何のために評価を行うかといえば、それは何らかの意志決定のためであるはずである。その審議会で指導的立場にあった先生の「意志決定を伴わない評価は遊びであり、評価に立脚しない意志決定は無謀である」という言葉が印象に残っている。その意志決定とは、研究資源の配分であったり、人事であったり、組織の再編であったりする。

評価に際しては、数量化できるものもできないものも含めて多様な物差しで計量することが

行われる。どのような物差し（評価指標）が適当であるかは、評価対象・目的・学問分野によって異なるが、可能な限り客観性のあるもの（必ずしも定量的であることを意味しない）で

あることが望ましい。評価を意志決定に結びつける際には、この評価指標の多次元空間を1次元に射影する作業が必要である。評価の目的に照らしてどのような射影を適当とするかは、その時の評価者の主観的判断によらざるを得ない。そこまで客観性を持たせようとするあまり、予め評価法を厳密に決

めるようなことをすれば、それは点数稼ぎの心理が働いて本来の研究活動を歪ませ矮小化することになりかねない。

評価は主観的行為と割り切ることである。ただし（必要とあらば）説明可能でなければならない。また、評価の目的が研究活動の活性化にある以上、評価を受ける側も評価する側もそれに費する労力が本来の研究活動を著しく阻害するものであってはならない。その意味では評価は「忘れた頃」に「良い加減」にやるのが良い。その「良い加減」が難しいのであるが。

ちなみに、冒頭に挙げた審議会では「我が国における」が一つのキーワードであった。我が国の風土にあった賢明な評価のあり方を工夫したいものである。

（物性研究所 家 泰弘）



（淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

〔次号の原稿締切〕

5月2日（水）午後5時

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

1213

2001年4月25日

東京大学広報委員会

〒113 8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail kouhou@adm.u.tokyo.ac.jp

ホームページ http://www.u.tokyo.ac.jp/index_j.html